

フランス文化セミナーについて

鷺見洋一（應義塾大学名誉教授・中部大学教授）

婦人三田会のご好意で、しばらくの間、月例のフランス研究会を担当させて頂くことになりました。

フランスとフランス人は、日本人にとってごく身近な存在です。世界一の観光国、美しい風景、奥深い文化、美味しいワインと食事。どれをとってもイメージが悪かろうはずはありません。また、フランス人たちも常々われわれ日本や日本人には一目置き、自分たちと同じような古い伝統や技芸を大切にする得難い国として、高い評価をあたえてくれているのです。昨今のパリにおける異常ともいえる「漫画」ブームもそのヴァリエーションといえるでしょう。

ところで、そうした「表向き」のフランス・イメージの裏側に、知られざるフランスの「素顔」や「実態」というものがあります。アンシアン・レジーム以来、戦争と経済に弱く、植民地や産業革命では英国に差を付けられっぱなしのフランス。武器、とりわけ核兵器の製造や輸出に熱心で、かなり儲けてもいるフランス。日本人の海外滞在者が一番ノイローゼになりやすい国、いわば日本人が実は苦手になっているフランス人。そうした「意外な」フランスの現実や実相は、やはり文学や芸術だけからでは、なかなか窺い知れません。広く歴史の経過や社会の仕組みを知らないと、フランス人の生活や思想の本質を理解することは難しいでしょう。

この月例会では、毎回特定のテーマを決め、婦人三田会の会員の皆さんがどなたでも気楽に参加できるような形で、2時間をデザインしたいと考えます。毎回、日本語（たまに易しいフランス語）の基礎資料を配布し、それを使いながら、パワーポイントとDVDによる夥しい映像・画像の引用によって話を進めます。文学部フランス文学専攻で行われているような語学一辺倒の教室ではなく、かといって教師の一方的な講義でもない、参加者と私との間に闊達な対話や質疑が絶えないような、双方向のコミュニケーションを重視する講座を目指したいものです。テーマはおのずと多岐にわたり、文学・芸術から経済・法律・歴史まで、万般におよぶことでしょう。お会いできるのを楽しみにしています。